

CAUA 第10回合同研究分科会 テーマセッション講評

只木 進一

佐賀大学総合情報基盤センター長・教授、CAUA 運営委員

CAUA 第10回合同研究分科会では、テーマセッション「アカデミック・クラウドは次のステップへ～来るべき『アカデミッククラウド2.0』を考える～」を開催し、大学でのクラウド活用の最先端を進む静岡大学情報基盤センターの井上先生と東京農工大学総合情報メディアセンターの辻澤先生のご講演を頂きました。

大学における情報システムは、研究・教育用として出発しましたが、各種業務の情報化によって、共通の情報システムだけでも多数となっています。さらに、学内の様々な組織がそれぞれの情報システムを保有し、ある意味で、無統制に情報システムの数を増加させてきました。こうしたことにより、情報システムにかかわる全体の電力、空調、運用などのコストの無制限な増大を引き起こしています。特に、運用の人的コストは、大学が払えるそれを大きく越えているのが現状です。こうしたコストの増加の抑制と、地震等の災害時での事業継続のためのひとつの解としてクラウドサービスの活用があります。

一方で、クラウドサービスに対しては、様々な心理的な抵抗感があります。本当にコスト削減になるのだろうか。学内の情報システムを外部に出すことで、セキュリティに問題はないのか。手元にハードウェアが無くなることによる、操作性や利便性の低下は無いのか。こうした不安を乗り越えてクラウドサービスを活用するには、客観的なデータや十分なメリットが見える必要があります。

静岡大学では、IT資産や電力消費の調査からはじめ、数値に基づく合意形成を行いました。学内にいかに多数の情報資産があり、それらがいかに大きな電力を消費しているかは、大学の多くの構成員にとって、驚くべきデータであったでしょう。このような客観的データに基づき、センターのサーバ室をプライベートクラウドとしてデータセンターに移行することからクラウド活用を開始しています。その後、各部署のサーバ類、デスクトップ環境のクラウド化を進めています。デスクトップ環境のクラウドサービスは、特に興味深いところです。ノートPCやタブレットPCの普及で、単一のデスクトップ環境を持ち運ぶ需要が増えています。デスクトップ環境のクラウドサービスは、こうした要求に応えるひとつの重要な解になるでしょう。

東京農工大学では、システム更新を機に、演習室端末のシンクライアント化、学内基幹情報システムのプライベートクラウド化を実施しています。注目されるのは、電子メールサービスのパブリッククラウドへの移行です。電子メールサービスは、基幹的サービスであり、また、ウイルス対策やスパムメール対策など、ベンダーソリューションに頼る部分が多いサービスでもあります。さらに、災害時などに止まってしまってもはいけません。このため、外部サービスを活用する組織が増えています。一方、業務メールには外部への漏洩が懸念される内容のものもあり、無料サービスの活用には強い抵抗感があります。東京農工大学では、大学向け商用メールクラウドサービスを活用することで、こうした要求を満たしたサービスへの移行を実施しています。

クラウドサービスは、大規模な商用サービスが現れ、普及のフェーズにあります。大学の情報システムのどの部分をプライベートクラウド、パブリッククラウドへ移行するべきかを検討する必要があります。また、サービスレベルの確保とそのための契約方法などの情報共有が必要です。